

## 保育内容表現（音楽）の実践について — 中国青島市幼稚園において —

The musical practices using the panel theater in the early childhood education  
— Through demonstrating at two kindergartens in Quindao City, China. —

李 智基 横井 一之 田沼めぐみ 松本亜香里 市川 沙織  
Zhiji Li Kazuyuki YOKOI Megumi TANUMA Akari MATSUMOTO Saori ICHIKAWA

Abstract: YOKOI visited the two kindergartens in Quindao City, China Sep. 2008 and played panel theater: “Felt Stories.” In this paper, we show how the preparations and demonstrations of the panel theater were done and also consider the feedback from the viewpoint of the players’ impressions.

はじめに

横井は2008年9月、中国山東省青島市の2つの幼稚園でパネルシアターを上演した。本稿では、上演に至るまでの準備、上演の様子と上演者の感想、そしてそれらをまとめ考察した。

2つの幼稚園の上演は、先生方のご協力、通訳の活躍もあり、大変うまく行うことができた。

なお、全体の計画を李、準備及び分析を田沼、松本、市川が行った。

### 1. 準備

中国を訪問しパネルシアターを上演するときに、幼稚園のスタッフに資料として、またお土産として手渡すために以下の楽譜（数字譜）、歌詞（中国語訳）、パネル（絵カード）、パネル台を作成した。

#### （1）数字譜について

数字譜とは、その名のとおり、「1・2・3・4・5・6・7」の数字で「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」を表す楽譜のことである。現在、日本では大正琴やハーモニカの世界などで使用されているが、世界的には五線譜が広く使用されており、日本も例外ではない。しかし、中国においては、現在も数字譜が一般的に使用されており、保育の現場でも五線譜が使用されることはほとんどないという。その為、中国の幼稚園でパネルシアターを上演するにあたり、上演曲を数字譜に書き直したものを準備し、持参することとした。ここでは、「とんでったバナナ」を例に挙げて、数字譜の仕組みを簡単に説明しておく。「とんでったバナナ」はCdur（ハ長調）の曲であるため、数字譜に書き直す際は、楽譜の左上に1=Cと表記する。これは、数字の1がCの音、つまりドの音とすることを表しており、順に2はレ、3はミとなる。しかし、数字譜は必ずしも1がドとなるわけではなく、調が変われば、

# 香蕉去哪儿了

1=C 4/4

5 3 5 3 | 4 6 5 0 | 4 6 5 4 | 3 4 5 0 |

4 4 5 6 1̇ | 7 6 5 3 0 | 2 2 2 6 0 2 | 5 5 5 6 5 |

1̇ · 6 5 3 1 | 2 2 7 1 0 | 5 6 6 5 5 6 6 5 | 2̇ 6 5 1̇ 0 :||

1.2.3.4.5.

6.

6 5 6 5 6 5 6 5 | 6 5 1 1 0 | 1̇ · 6 5 6 | 1̇ 6 1̇ 1̇ 0 ||

譜表1 とんでったバナナ (数字譜)

1がファになることもあれば、1がソになることもあるので注意が必要である。音の高さは、一オクターブ高くなれば、数字の上に点を一つ、一オクターブ低くなれば数字の下に点を一つ付けることで表され、音の長さは、四分音符より短い音は、数字の下にアンダーラインを付けることで表され、一本だと八分音符、二本だと十六分音符となる。四分音符より長い音は、数字の横にラインを付けることで表され、一本だと二分音符、三本付ければ全音符となる。また付点音符の場合は、数字の横に点を付けることで表され、これは五線譜の場合と同様なので、わかりやすい。最後に休符についてだが、休符は0で表記し、四分音符より短い休符や、付点四分休符については、音符と同様に表されるが、二分休符より長い休符については、0を必要な分だけ付け足すことで表される。以上が数字譜における、基本的な仕組みであり、譜表1はこれらの仕組みを踏まえて、五線譜から書き直した「とんでったバナナ」の数字譜である。

## 香蕉去哪儿了

有一个香蕉在这里  
 蓝蓝的天空真呀真呀漂亮  
 有两个小朋友在那里玩耍  
 香蕉嗖~的飞跑了  
 香蕉到哪儿去了  
 Banana banana banana

有一只小鸟在这里  
 住在椰子树下的鸟巢里  
 正在望着天空的时候  
 有一个香蕉掉了进来  
 香蕉没有羽毛但也很松软  
 Banana banana banana

表1 とんでったバナナ (中国語)

小鸟问香蕉你是谁呀  
 并且用嘴啄着香蕉  
 香蕉很疼很害怕  
 香蕉嗖~的逃跑了  
 香蕉可不想被吃掉  
 Banana banana banana

有一只鳄鱼在这里  
 在白色浪花的海边  
 这只鳄鱼正在跳舞  
 突然一个香蕉掉了下来  
 太阳公公笑眯眯  
 Banana banana banana

香蕉和鳄鱼一起来跳舞  
 蹦擦擦 蹦擦擦  
 鳄鱼鳄鱼总踩着香蕉  
 香蕉嗖~的逃跑了  
 香蕉跑到哪去了呢  
 Banana banana banana

有一艘大船在那里  
 船长留着长长的胡子  
 张着大嘴正在睡午觉  
 香蕉正好掉到嘴里  
 阿呜阿呜被吃掉了  
 被吃掉了，被吃掉了

## (2) 中国語訳

上演したパネルシアター5題の歌詞を、本学留学生に助けをいただきすべて中国語に訳した。そのうち、「とんでったバナナ」の歌詞（中国語）を表1に紹介する。

## (3) パネル（絵カード）作成

とんでったバナナのパネル（絵カード）を次の順で作成した。

- ① 下絵<sup>り</sup>より鉛筆で複写、②線を油性マジックで太く描く、③水性絵の具で着色、
- ④船のパネルに船長の頭を二重糸でくくる、⑤木製ボンドで太陽を裏表貼り合わせる。

とんでったバナナのパネル（絵カード）を訪問してパネルシアターを上演する予定の幼児園数4組を制作した。上演後、幼児園にプレゼントした。

## (4) パネル台作成

今回、パネル台を幼児園に寄贈するという事で、贈り物としての格好が付くように、パネル台の裏に布を当てる作業と、パネル台を入れる袋の作成を行った。パネル台、袋ともに2種類の柄で2つずつ作成した。

まず、パネル台を入れる袋のほうであるが、布地は、園児の好みそうな柄を探し、ピンク地にディズニーのキャラクターのものと、青地に機関車トーマスの柄を選んだ。中国の幼児に人気のキャラクターをリサーチする時間がなかった為、機関車トーマスが中国で周知されているのかは分からなかったが、万が一、キャラクターに対して反応がなくても「乗り物の柄」として関心を引けるのではないかと思い、選択した。

袋の形は、よくあるピアノのレッスンバッグの様なシンプルなものを思い描き作成した。生地は、丈夫でクッション性のある厚手のキルティング素材を選び、固めの布テープで持ち手を付けた。次に、パネル台の裏に布を縫い合わせる作業を行った。こちらは、袋の色に合わせて、ピンクのチェック柄と水色のチェック柄のもので作った。もとのパネル台は、二つ折りに出来る発泡スチロールの板に、パネル布を貼り付けただけのものであったため、裏側はパネル布やガムテープが見えたままになっており、真ん中の部分は土台の発泡スチロールが剥き出しの状態、見栄えが悪かった。それを隠す為に、裏側全体に、布を縫い合わせることにした。こちらは手縫いで行ったため、とても時間がかかった。

## 2. 上演の様子

### (1) 青島技科大学附属幼児園

①日時 2008年9月5日（金）午前9時20分

②上演クラス 中班（4歳児）約30名 教師2名、保育員1名

③上演曲

a. 手遊び ころころたまご 2分8秒

(ア) 内容 たまごから、ひよこ、にわとりと成長していくことを手遊びにしたもの。

(イ) 特徴 この曲の題材であるにわとりは、中国でも馴染みのある動物のため、成長段階を理解しながら遊ぶことが期待できよう。

(ウ) 子どもの姿 知らない国の言葉で、来客者が突然上演を始めたにも関わらず、子どもは集中して見ていた。終始静かに見ていたが、最後に「ニーハオ！」という掛け声を付けたことで、盛り上がっていた。

b. パネルシアター シャボン玉とばせ<sup>2)</sup> 4分22秒

(ア) 内容 9種類の動物が出てきて、シャボン玉を膨らませる。「とりさん」なら「かわいいシャボン玉」、「ぞうさん」なら「おおきいシャボン玉」と、その動物らしいシャボン玉が出来上がる。歌詞が、登場する動物の鳴き声などから始まるので、イメージを膨らませやすくなっている。

(イ) 特徴 この歌は、ある動物がシャボン玉を吹くと、自分の形に膨らませられるということに面白さがある。さらに、「プッ」と「プク」など、半濁音の反復と、音階の上がる部分が重なり、子どもが好む要素を含んでいる。

(ウ) 子どもの姿 最初は何が始まるのかと、注意深く見ているだけであったが、知っている動物が出てくると、子どもの表情が変わった。教師が問いかけると、口々に答えており、動物当てゲームのようになっていた。「プップクプ プクククプ」のメロディーが親しみやすかったのか、繰り返し出てくるうちに、一緒に口ずさむ子も出てきた。

教師の方が、パネルシアターの作り方に興味を示していた。

c. パネルシアター まんまるさん<sup>3)</sup> 5分12秒

(ア) 内容 パネル上には、初めに「まんまるさん」という、ただの丸い形が出される。その色と大きさから想像して、何の動物かを当てていくものである。

(イ) 特徴 この歌は、想像力と集中力を養うことに役立てられよう。現に、子どもたちは、集中から、想像、発言のプロセスを経ることができている。

また、この歌では10種類の動物が出てきているが、その他の動物も、子どもの興味や季節のことを考え、保育者が考え作成することも可能である。

(ウ) 子どもの姿 日本語が解からなくても「シルエットから動物を当てる」ということは直ぐに理解できた様で、「まんまるさん」が出てきた時と、動物の顔が出てきた時に、皆、口々に答えていた。次に何が出てくるのか、その瞬間に一番集中しているように見えた。

d. パネルシアター たまごでおりょうり<sup>4)</sup> 6分17秒

(ア) 内容 歌詞は、たまごをボン！と割って、色々な卵料理を作っていくというものである。

(イ) 特徴 この歌もまた、既成の歌詞以外に、子どもに馴染みのある料理などを起用するという工夫もできよう。

(ウ) 子どもの姿 「ボン！」という歌詞に合わせて手を叩くため、手の叩き方を先に指導した。子ども達は、これを理解すると、教師に合わせて手を叩くようになったが、卵の数が1つずつ増えていくことや、「ゆでたまご」の時は叩かないと

いうところまで理解できているかは分からなかった。しかし、中には、卵の数を数えて確認している子どももいた。

たまごの特性や、調理法についても、きちんと理解ができていないようであった。これは、食文化の違いもあるように感じた。

歌の意味を理解しているかは別とし、子ども達は、対保育者で同時に手を叩くという動作に楽しさを見出すとともに、「ポン」という音を楽しんでいた。

e. パネルシアター とんでったバナナ 2分47秒

(ア) 内容 バナナが皮から「ツルン」と飛び出して、いろいろな人物と出会い、旅をするという歌である。

(イ) 特徴 この歌は、場面変化の頻度が多いため、1人で演じるとすると取り付けの練習を要する。場面変化で、バナナが、他人と出会うたびに「食べられるのではないだろうか」という緊張感が生まれる。また、擬音語がたくさん使われており、子どもが好む要素を含んでいる。

(ウ) 子どもの姿 曲にストーリー性があることを瞬時に理解したようで、登場人物を一生懸命目で追うなど、集中しているように見えた。ワニや船長が出てくると、盛り上がる部分もあった。最後の、バナナが食べられてしまうところでも、反応が見られた。

④上演者の感想

前日9月6日午後、系列園が5園ある青島市実験幼稚園を訪問した。そこでパネルシアターのとんでったバナナを、N園長先生を初めとする7、8名の関係者の前で演じた。演じた後、パネル（絵カード）とパネル台をN園長先生にお土産としてプレゼントした。そのとき、両国の友好の雰囲気が一気に盛り上がるのを感じた。

このように既に中国初上演は済んでいたもので、本日の上演はほとんど緊張せずに取り組むことができた。

a. 手遊び「ころころたまご」は、昨年7月中国青海省西寧市の幼稚園を訪問したときに、既に中国の子どもに演じたことがあり、その時と同じように中班（4歳児）では、ゆっくり手の動きを説明すれば、卵、ひよこ、鶏の表現とも十分に楽しんで演じるものである。

b. パネルシアター「しゃぼん玉とばせ」を演じたが、歌詞が分からないこともあり、また雰囲気は馴染んでいないこともあり、背筋を伸ばし姿勢を正したまま鑑賞している子どもが多かった。すでに中国語の歌詞カードをまとめた冊子は園長先生にお渡ししてあったが、ピアノの上に乗せたままだったので、改めて横井が手に取って担任の先生へ、歌詞カードのページを開いてお見せした。

c. パネルシアター「まんまるさん」では、通訳をしてくれたS君がそのまま担当すると思っていたが、上演の場で、段取りを担当に伝え、担任が子ども達に伝えることになった。初めのうちは少しぎこちなかったが、子ども達のことをよく理解している担任なので、

動物を見せて「だれだ？」と尋ねるところは、日本で演じているのと変わらないほどスムーズだった。

d. パネルシアター「たまごでおりょうり」では、「次は卵2つです。2つ手拍子を打って下さい」という通訳を、横井→S君→担任という手順で行った。一文ずつ、2人を通して通訳するので、ややタイミングが遅れ、すこしぎくしゃくした。

e. パネルシアター「とんでったバナナ」では、最初のパネルシアター「しゃぼん玉とばせ」に比べて、子どもたちがより積極的に鑑賞したと感じた。両作品とも、音楽に合わせてパネル（絵カード）を貼っていくものである。

## (2) 青島師範学校付属幼稚園

①日時 2008年9月8日(月) 午前9時30分

②上演クラス 中班2組(4歳児) 37名 教師2名、保育員1名

③上演曲(パネルシアターについては、青島技科大学付属幼稚園での上演と同じため、「内容」と「特徴」を省略とする)

a. 手遊び かなづちとんとん 0分41秒

(ア) 内容 からだの部位を振ることで、かなづちを叩く動作とみなし、展開していく歌である。1本目は右手、2本目は左手、3本目は右足、4本目は左足、5本目は頭で、最後には全ての部位を振っている状態になる。

(イ) 特徴 これは、体全体を使った歌のため、視診をするのには適している。そして、2歳児から6歳児まで、幅広い年齢で楽しめるため、全体の場面でも使用しやすい。両手を振るところまでは、比較的容易ではあるが、足の動作が入ると難易度が増す。さらに、頭の動作が加わると難しくなる。

歌については、音域が5音で、単純な旋律となっているため、耳に入りやすく、覚えやすい。

(ウ) 子どもの姿 ここでは、上演者に加え、通訳者も積極的に参加していたため、子どもに対しても、知らない国の言葉で繰り広げられていく一方ではなく、コミュニケーションをとりながら進められていた。

ほとんどの子どもが上演者の模倣をしながら動作をし、楽しんでいるようであった。歌う前に、上演者が動作の指導をした時も、すぐに反映されており、普段の担任の指導力や信頼関係が伺われた。

b. パネルシアター しゃぼん玉とばせ 4分28秒

(ア) 子どもの姿 保育者が音楽に合わせて手拍子をしていると、子ども達も合わせて手拍子を始めた。中には、踊っている子どもも見られた。動物のパネルを出す時は、「次は何の動物が出てくるのだろう」と、集中が高まっていた。

ここでも、やはり教師や保育員、通訳者の協力が大きかった。

c. パネルシアター まんまるさん 5分01秒

(ア) 子どもの姿 上演者は「これ何だ」と色が塗られた丸いパネルを出し、子どもに投

げかけ、それを動物の形に変化させていくと、子どもは次々に答えていた。次からは子どもが積極的に答えるようになった。次第に動物の形になる前の、丸の状態で答える子どもも出てきた。

ここでは既成のCDを流さなかったため、上演者と子どもの中にコミュニケーションが取りやすかったようである。子どもから正解が出た時は、全員で拍手をしていた。

d. パネルシアター たまごでおりょうり 5分50秒

(ア) 子どもの姿 上演者は、たまごは割って食べるものということを説明し、手の叩き方を指導し、練習をした。子どもたちは素直に指導を受け、日本語で「たまごを」と言うと、「ボン」という言葉と共に、手を叩いていた。

歌が始まり、2番の「目玉焼き」が出てくると、拍手をした。3番の「ゆで卵」は手を叩かないため、その練習をしたのだが、比較的すぐに子どもは理解していた。最後に出てくる「いただきます」の言葉の意味と手を合わせることを教えると、子ども達は模倣し、声に出し「いただきます」と言っていた。

e. パネルシアター 飛んでったバナナ 3分12秒

(ア) 子どもの姿 上演者がバナナを指し「バナナは好きですか」と子どもに尋ねると、次々に子どもは答えていた。歌が始まるとすぐに手拍子が起こっていた。バナナが飲み込まれるところでは、手拍子を止め、全員が止まって見ている。

④上演者の感想

a. 手遊び「かなづちとんとん」を初めに演じたが、1番が右手、2番が左手のかなづちまでは、子ども達は何が起こったかと他人事のように見ているが、さらに3番右足までとんとんすると、体全体を揺るようになり、体も心もほぐされてきて、うち解けてきた。この勢いで、次のパネルシアターを行った。

b. パネルシアター「しゃぼん玉とばせ」は、言葉の壁があるので絵で理解することができているようだが、あまりよい乗りではない。たまたま保育助手さんのして下さる手拍子が静寂の中に鳴り響いた。

c. パネルシアター「まんまるさん」は、昨日の幼稚園では通訳の関係でタイミングがずれて、担任の先生まかせになってしまったが、ここでは通訳のA君が横井の指示通りに「だれだ?」「ねこ!」というように、よいタイミングで受け答えをして下さった。前に乗り出して動物の名前を言おうとする子どももおり、積極的に鑑賞してくれた。

d. パネルシアター「たまごでおりょうり」では、通訳のA君が子ども達に説明を丁寧にしてくれた。1回、2回、4回と「卵を」「ぽん」とタイミング良く子ども達はかけ声を上げてくれた。また、3回の手拍子を空かすところも、上手くたたかずに演じてくれた。通訳のA君の子どもに話しかける能力の高さを感じた。

e. パネルシアター「とんでったバナナ」は、テープレコーダで音楽を流しての演技であったが、1～5番まで話の流れがあるので、興味を持って見てくれる子どもが多かったよ

うに思う。

### 3. 考察

中国の方に日本の音楽を理解していただくときに、表記する場合は楽譜と中国語の歌詞が必要となる。今回、日本で用いている五線譜を数字譜に変換して中国へ持参した。実際、青島師範学校附属幼稚園を訪問して、S園長先生にお会いして楽譜を渡すと、その数字譜を見てとんでったバナナのメロディを口ずさまれた。ただし、S園長先生は師範学校で学生に音楽の指導をなさっているため、次のページにある五線譜の楽譜もちゃんと口ずさまれた。私たち日本の保育者にとってはあまり見慣れない数字譜を普通に利用している現場をみて感動というか、その不思議さを感じ入った次第である。以下に、その数字譜について若干考察を行う。

数字譜の欠点として、複数の音を同時に出す楽器の楽譜においては、音の数だけ数字を重ねて記載するため、複雑になり読みづらいという点が上げられるが、田沼が見たことのある、中国の保育現場で使われる手遊びなどの曲集は、旋律が数字譜により表されているのみで、伴奏はついていない。また、前述のように、調に関しては、1=Fや1=Gという形で表されるが、五線譜のように調号は表記されていない。つまり、演奏者は1=Fや1=Gという表記を見ただけで、その曲の調号がb(シ)1つ、#(ファ)1つということ判断する知識が必要だということである。以上のようなことを踏まえると、中国が、数字譜を使用しているからといって、音楽知識が低いということに繋がるわけではなく、旋律のみの楽譜に、自分で伴奏を付けて弾いているのだとしたら、それは非常に高等な知識と技術が必要だということがいえるだろう。

さて、中国語の歌詞であるが、留学生の趙 瑩さんに翻訳を頼んだ。この歌詞のおかげで、中国の幼稚園では先生方に歌の意味が伝わり、大変重宝がられた。この場を借りて趙 瑩さんに謝意を述べたい。

当初の予定では、中国語に訳した言葉を旋律に割り当て、中国語で歌えるようにする計画であった。ところが、趙さんに相談したところ、うまくいかないと言う。旋律に無理やり言葉を当てると、意味が分からなくなってしまうのだそうだ。旋律の高低に、中国語の抑揚が合わないということだろうか。中国語は、同じ音でも、4種類の声調があり、よく聞く例としては「マ」の音があるが、語尾の上げ下げで「お母さん」「麻」「馬」「叱る」と、別の意味を持った言葉になる。日本語においても、英語等に比べてアクセントが少ない分、高低が重要な役割を果たしており、例えば、山田耕筰の歌曲「からたちの花」などは、言葉の抑揚と旋律の高低が一致しており素晴らしいと評されている。(「赤とんぼ」は「ゆうやけ こやけの あか とんぼ」という部分で「あか」が「高低」の順になっており、現代の日本語とは一致していないが、当時はそのような高低であったため、これは間違いではないというのは周知のことである。)

このように、旋律というものは、その国の言語に自然と沿うように作られているというこ



とが分かり、別の国の言語を当てはめてくることの難しさを実感することとなった。

また、「とんでったバナナ」にある「ふんわりこ」であるとか、「ポンボコツルリン ポンツルリン」といった擬態語が出てくるが、それに上手く相当するものが中国語にはないようで、趙さんにニュアンスを伝えるのに苦労した。そのため、日本語であれば、子どもを惹きつけられるポイントとなるはずの言葉が欠けてしまい、子どもにとって親しみやすさが減少してしまったかもしれない。

パネル（絵カード）であるが、訪問した3つの幼稚園とも先生方はその色合い、添付力（くつつき具合の良さ）に驚かれた。磁石でくつついていると考えていらっしゃる先生もみえた。ただし、世界中の教材に通じていらっしゃるのか実験幼稚園のN園長先生は「ワイシャツの衿芯に使ってあるよね」とジェスチャーで示された。今後も、教材研究は大切である。

次に、パネル台および袋についてであるが、作りかけの当初は、「パネル台が入るように」ということしか考えておらず、また、市川が決して裁縫が得意という訳ではなかったため、マチもなく、厚めの布テープで持ち手を付けただけのシンプルな袋に仕上げた。しかし、もう少し拘るとすれば、物語ごとにパネルを収納出来るような間仕切りを付けたり、袋の外側にポケットを付けたりすれば便利だったかもしれない。また、厚手のキルティング素材だったため、裏地は付けなかったが、長く使っていただくことを考えれば、裏地を付けて少しでも丈夫にしておくべきだったかなどと、反省している。

パネル台の裏に布をあてることに関しては、贈り物でなくとも、見栄え良くする工夫はした方が良く越した事はないので、今後、授業等に使用するものにも、布を被せたいと思ったが、時間がかかり過ぎては気力も湧かないので、もっと簡単に出来る方法はないものかと思っている。何も縫わずとも、接着剤でくつつけるだけでも、ずいぶん違うと思うので、普段使いにはその方法を取り入れようと思う。「もっとこうすれば良かった。」という点はいくつもあり、また今後活かしていきたい。

最後に、最も大切な上演の様子についてであるが、次の3つにまとめることができる。

- (1) 手遊びは、言語を超えて子どもの目を引き、集中することが出来る。
- (2) 意味の内容がわかりにくいパネルシアターは、何度も繰り返すと集中力が下がる。
- (3) 問いかけ、言葉のやりとりがあるパネルシアターは、通訳を通して行っても楽しく交流できる。

以上、3つの点において、今回の上演は大いに成果があったと自負している。

また、このような教材を通しての日中、中日の幼児教育関係者の交流だが、これを通して我々の教材研究も深まるし、中国理解も深まる。本学には多くの中国人留学生が学んでおり、このことは保育の理解のみならず、学生理解に直結していると言える。

#### <引用文献>

- (1) 古宇田亮順『パネルシアターを作る3』東洋文化出版 2003
- (2) 古宇田亮順『パネルシアターを作る1』東洋文化出版 1987

(3) 古宇田亮順『パネルシアターを作る2』東洋文化出版 2001

(4) 古宇田亮順『うたってパネルシアター』大東出版社 1995

<参考文献>

(1) 小方 厚『音律と音階の科学』講談社ブルーバックス 2007